

第17回

渡辺 英二

〔聞き手〕 濫澤 健

(元日揮相談役)

(モンス投信会長)

自然科学が好きで理系に進む

濫澤 第九十号掲載の「博聞意伝」は渡辺英二さんにご登場いただきました。事前にご提供いただいた資料を拝見しますと、渡辺さんは一九三〇年のお生まれで、私の父親は二九年生まれですからほぼ同年代であり、父親と話すようなつもりで伺って行きたいと思っています。

渡辺さんのご祖父は北海道根釧平野の開拓者であり、お父上は厚岸の生まれで、札幌中学、第七高校、東大法学部を出られ、日本銀行を経て三和銀行頭取・会長を務められた。そして百六歳の天寿を全うされた。お



母上も百二歳で亡くなられたという長寿のご家系ですね。

渡辺 家系的に皆が長寿ということではないのですが、父は九十歳までゴルフをやっていました。健康家でしたね。うなぎが好物でした。

濫澤 渡辺さんのお生まれはどちらですか。

渡辺 兵庫県の芦屋です。小学校は二年生までは芦屋で、それから東京へ移り、麻布小学校は三年生からです。高校は成城高校です。

濫澤 関西でお生まれになり、東京に來られて何か変わったことはありませんでしたか。

渡辺 小学生の頃のことですから、格別違和感を覚えるということはありませんでした。

濫澤 戦争のご体験は中学生時代ですか。ご記憶はありますか。

渡辺 戦争の記憶は鮮明にありますよ。東京では空襲を体験し、敵機の機銃掃射も目前にしています。終戦時は軽井沢に疎開していました。当時疎開していた仲間ではまだに同窓会と称して八十台半ばの男女が集まります。最近亡くなられてしまいましたが浅野久彌さ

んとか駐米大使をされた栗山尚一さんも仲間です。

濫澤 そうですか、栗山さんのご息女とは、以前勤めていた日本国際交流センターで一緒だったことがあります。それで大学は大阪大学の理学部に進まれたのでしたね。

渡辺 そうです。理学部化学科で同級生三十一名の中には、文化勲章を受章した花房秀三郎君(分子生物学者)、学士院賞を受賞した菅宏君(物理化学者)がいます。濫澤 渡辺さんが理系に進まれたのはどのような経緯だったのでしょうか。数学が得意だったのですか。

渡辺 数学というよりも理科が好きでしたね。私は小学校の頃から、自分は理系の人間だと思っておりまして、それで、そうした進路に進みました。

濫澤 実は私も化学工学部なのですが数学というよりも自然科学が好きでした。それで大学を出られた後海外留学をされていますが、どちらの大学ですか。

渡辺 スイスの工科大学です。留学(二九五四年)当初は学者になるつもりでしたが、自分はどうかやら学者に向いていないと考え産業界に転進しました。人生には必ずどこかで分かれ道に出会います。右に行くか左

に行くか自分で決めることのできる場合もありますが、四囲の状況で決まってしまうこともあるでしょう。ノーベル賞を受賞された湯川先生ははじめ実験物理を目指されたそうですが、手先が器用でないので真空技術に必要なガラス細工が苦手で理論物理に転向されたと回顧されています。ニュートリノの研究でノーベル賞を受賞された小柴先生は逆に理論物理を志向されたが、ご自分の適性に見切りをつけて実験物理に転向されたと「私の履歴書」（『日本経済新聞』）に書いておられます。

学者志望から産業界へ

澁澤 自分の意志で決められない場合はいたしかたありませんが、自分の意志で進む方向を決める場合、その判断の基準はどのように決められるのですか。

渡辺 私の場合「自分は学者にはなれない」と自覚したとしか言いようがないですね。それで帰国後昭和電工に就職することになりました。当時産業界では戦後の復興期で海外からの技術導入が盛んに行われていました。理系の人間で英語・ドイツ語が話せる人はいませんでしたから会社では重宝に使われたのですが、仕

事の上で会社トップの身近で働くことが多く、たいへん参考になりました。

当時昭和電工ではカルシウムカーバイドを製造しており、食塩電解の工場も持っていましたのでカルシウムカーバイドからアセチレンを作り、食塩電解の塩素と結合すれば合成ゴムのネオプレンを作れるではないかということで米国のデュポン社と交渉し、合併会社を作ることになりました。この工場はたいへん危険がともないます。重金属のアセチライドは触れると爆発すると教科書にも書いてありますし、中間体のモノビニルアセチレンは爆発力でダイナマイトと同等であり、副生物のジビニルアセチレンにいたっては常温で自然発火します。デュポン社で私の親しくしていたエンジニアは米国の工場の爆発事故で亡くなってしまいました。危険なプラントだけに工場長以下二十七名がアイランドにあるデュポン社の工場に半年にわたり実習に行かされました。こんなことは化学業界では未曾有のことだったと思います。川崎の工場が完成して稼動してからも、就寝中に電話が鳴ると、事故ではないかとギョッとして飛び起きたものでした。今はプロセス

が変わってしまっていますから、そういう危険はないでしょうが。

その次は米国のユニオン・カーバイド社と合成ゼオライト製造の合併会社を設立しました。その製品は現在福島原発の汚染水処理に大きく貢献しています。当時昭和電工には十指をこえる海外との合併会社があったと思いますが今なお立派に稼動し、かつ利益を上げているのは私がかかわったこの二社だけであり、これは私が大いに誇りにしていることです。

澁澤 そのように早くから昭和電工で活躍されていて日揮に移られたのはどのような経緯があったのですか。
渡辺 私が日揮に入社したのは一九七〇年で、当時、日揮の社長の鈴木義雄さんと昭和電工の副社長の鈴木治雄さんとは兄弟だったのです。つまりトレードですね。当時日揮はエンジニアリング・コントラクターとして、これから海外に乗り出そうという志向を強くしていた時期でした。エンジニアリング会社というのは、一般消費者とは全く接点がありませんから、馴染みもありませんが、原発の多くが停止している現在、わが国で消費される電力の四十六パーセントは日揮のよう

な会社が海外に建設した液化天然ガスプラントから作られるLNGを燃料としています。日揮に移ってから

は世界中いたるところに毎月のように出張しました。
澁澤 当時日揮の展開の中心はどちらだったのですか。
やはり中近東ですか。

渡辺 はじめは単発的に南米とかアルジェリアの仕事でしたが、東南アジアが多かったですね。中近東はもつとあとです。

澁澤 東南アジア、南米、中近東と風俗も文化も異なるところですが、ビジネスの習慣も違ったでしょうね。日揮は海外で仕事を展開する上の方針とか、社是这样的なか企業のDNAのようなものはあったのですか。
渡辺 日揮がメイジャー・オイル、特にシエルとかカルテックスの仕事をしたこと、彼等からの引き合いに応じるために世界中に出かけていったのが大きな要因でした。また日揮が大きく発展したのはさきほどお話ししたLNGプラントを手がけたことによるものです。LNGプラントの建設には何千億円という莫大な費用がかかります。これを一括して手がけることのできるエンジニアリング会社は世界でも数社しかないの

です。

澁澤 そういうエンジニアリング・コントラクターの仕事とは人、物、金、時間、情報をいかにマネージするかということのようですが、情報とはどんな情報ですか。

渡辺 技術上の情報は勿論ですが、相手国の政治・治安・商習慣まで含めて考えなければならぬことは沢山あります。契約とか法律の知識も欠かすことはできません。

澁澤 最近バン格拉ディシュで大きなテロ事件がありました。三年前、日揮はアルジェリアの天然ガスパラントで人質事件に巻き込まれて犠牲者を出しました。この事業はアルジェリアの国益にもなかったものであった筈なのにこういう事件が起きることがとても残念です。

渡辺 私はもう会社を退いてから十五年ほどになりますので現状について意見を申し上げる立場にありませんが、途上国では政府と政府に対抗する勢力が常に争っており、その利害関係に日本の会社が意図せずに巻き込まれるということでしょうね。特にそれが宗教が

らみになると我々日本人には理解の及ばないことが多いのです。アルジェリアでも私がたびたび訪れていた頃は地中海沿岸の都会はテロが多く、むしろ内陸の砂漠地帯に入ってしまうとテロリストも自由に移動できないので安全であるということ、パリから直接砂漠地帯のガルダヤなどに入っていました。しかしリビアのカダフィ政権が米国により倒されると、リビア国境から数十キロしか離れていないイナメナスなどは武器がリビアから簡単に流れてきます。しかも最近ではテロリストもGPS（衛星測位システム）を利用することにより砂漠地帯の移動も簡単になり、以前と状況は全く異なっていると考えなくてはならないでしょうね。

澁澤 先ほどの情報の中にはセキュリティということもあるのでしょうか。

渡辺 それは勿論ありますね。

理系の教育を受けた文系人間

澁澤 こうしてお話を伺いますと、渡辺さんは世界を駆け巡って硬派のお仕事をされてきたということがよく分かりますが一方では『ほぼづゑ』誌面で拝見する

ように、芸術家でもあられます。

渡辺 私は自分でも理系人間ではなくて理系教育を受けた文系人間ではないかと思うことがあります。話が『ほぼづゑ』に辿り着きましたが、私は四号（一九九五年春号）から同人に加えていただきました。『ほぼづゑ』との関わりには大変感謝しています。今では『ほぼづゑ』とのかかわりが老人性痴呆症の防止に大いに役立っています。発行人の鈴木治雄さんは昭和電工勤務時代の社長であり、初代編集長の住吉弘人さんは日揮での仕事上のお付き合いがありお会いする機会も多くありました。

私は学生時代から文章を綴ることが好きで、寺田寅彦の随筆を愛読していました。寺田寅彦は物理学者であるとともに夏目漱石の最古参の弟子でもありました。師である漱石の側が充分な敬意をもって遇したと言われています。寺田のX線回折による結晶格子の解析は、ノーベル賞に値するとして学士院恩賜賞を受賞（一九一七年）しています。

澁澤 本日はいただいたメモの中で、「大科学者が大きな発見をし、優れた理論を組み立てているのは、まず

直感的に結果を見通し、あとでそれに達する理論的な経路を確立した場合が多い。この直感は芸術家のいわゆるインスピレーションと似たものである」という寺田寅彦の言葉を引いておられますが、この直感的ということとは、学べるものなのか、自身の遺伝子に刻み込まれたものなのか、これはどう思われますか。

渡辺 どうでしょうね。やはり偉い学者は生まれ持つ才能というものがあるのでしょうか。寺田寅彦の言っていることは芸術と科学は対立するものではなくてそれぞれのあり方には共通したものがあるということでしょうか。デジタルとアナログということかな。『ほぼづゑ』同人に加えて貰って、鈴木治雄さん、住吉弘人さんという先人から直に薫陶をいただいたのですが、絵に関して言えば、私は正式に絵を習ったことはないのですが、もともと美術に関心が深く、『ほぼづゑ』同人に加わってからは多くのカットを描かせていただきました。また住吉さんが主催されていた五彩会という、財界人十人ほどの画会に私も入れていただきました。私は後半の八年ご一緒させていただき、住吉さんが亡くなられたあと、その衣鉢を継いだ遊彩会という

画会はすでに九回を数えています。

濫澤 絵は子供の頃から好きだったのですか。

渡辺 好きでしたね。父親についてよく美術展を訪れました。

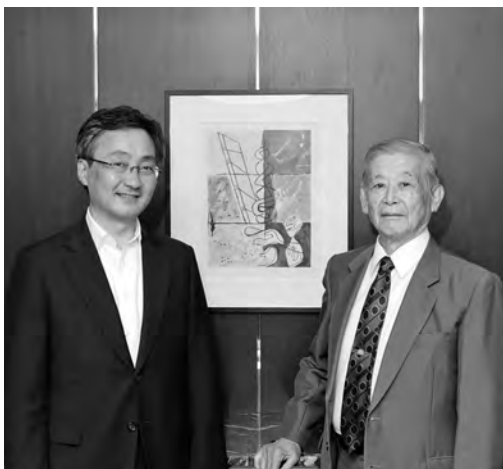
濫澤 音楽はどうですか。

渡辺 好きですよ。一時チェロを習ったこともありましたが才能なしということであきらめました。

濫澤 絵も音楽もそうですが、自分を表現できるということは素晴らしいことですね。

渡辺 その通りです。殊に私は文章を書くことが好きで、日揮の現役時代には、多くの新聞や雑誌から寄稿を求められて原稿を書きました。『日本経済新聞』の「あすへの話題」欄に半年にわたって寄稿した際には多数の未知の読者から沢山のお手紙をいただきました。また同紙の「交遊抄」欄にも都合三度寄稿しました。三度目の時には、同じ筆者が三度も「交遊抄」に書くのはおかしいのでは、とことわったところ、構いませんから書いて下さいということで、最後は『ほぼづゑ』同人の交遊について書きました。

また『文藝春秋』の創立八十周年の特別臨時増刊号



濫澤健氏、渡辺英二氏

してから使っていましたし、秋葉原でモデムを買うのに店員自身がモデムの機能を理解してなくて間違った機種を買わされたりしました。私のパソコンにかかわる能力は当時からほとんどガラパゴス状態だと言ってもいいでしょう。わからないことがあると息子か孫に出張を要請します。

濫澤 ファースト・ランナーとも言いますが、渡辺さんはまさに先駆者ですね。

私は八〇年代に仕事を始めたのですがテレックスやロイターを使っていました。金融マーケットとか為替

(二〇〇二年)、特集「日本人の肖像」を出した際に寄稿を求められたのですが、寄稿者は私以外は著名な学者、文筆家であり、編集部に理由を問い合わせたところ、日揮の会長としてではなく『ほぼづゑ』同人として書いて下さい、と言われて『ほぼづゑ』の世間における存在感を認識させられました。

濫澤 渡辺さんは原稿をお書きになる時、手書きですか、それともパソコンをお使いですか。

渡辺 パソコンを使っています。私がパソコンを使い始めたのは一九八三年でわりと早かったですね。まだマイコンと言っていたのではないのでしょうか。『ほぼづゑ』の第十二号(一九九七年春号)で「私とパソコン」という特集を組んでいて、特集座談会「私のパソコン奮闘記」(出席：佐藤文夫、千野冨時、渡辺英二、司会：住吉弘人)が掲載されています。パソコンで便利だと感心したのはワープロ機能とメールでした。それまでオフィスではカタカタと音をたててテレックスのテープが出てきたものですが、モニター上ですべて処理できるようになったわけです。でもはじめの頃はソフトはカセットテープに入っているのをディスクに移

の情報のやりとり在当时使われ、カタカタと印字されたテープが出て来ていましたね。大学の頃、ソフトウェアをプログラミングする時に、穴を空けたパンチ・カードでコードを書き込んでいました。今では信じられない風景でしたね。

渡辺 Eメールにしても随分様変わりして来ましたよ。息子の家族がロンドンにいた時、電話でやり取りしていたのですが、何でもないやり取りの間に、どんどん料金が上がって行きます。これはいかんということで、メール通信に切り替えたのですが、初期のEメールは日本語の表示が出来ませんでした。すべて英語のやり取りです。今ではとても便利になりました。これも隔世の観です。世の中変わってしまいました。そして、その境目に私のような世代の者が居るのですよ。

濫澤 たかだか三、四十年のことですからね。今後三十年というところなのでしょうね。

渡辺 ただこの急速な進歩と変化が本当に良いことばかりかと言うと疑問もありますね。犯罪も進歩してきているし、民族間、宗教間の軋轢もあつと言う間に拡散してゆきます。私は日本のようにあらゆる宗教に対

して寛容に、柔軟に受け入れるのが正しいあり方だと思ふのですが、そんな考えは世界では通用しないのが現状です。

濫澤 バングラデイシュで犠牲になった日本人は現地の民生のために、あるいは国土の建設に携わった人たちで、反イスラムとか宗教戦争とは一切関係のない人達です。

渡辺 私がかつて、仕事でイスラム圏に頻繁に行っていました。ある時、西欧で教育を受けた紳士然とした人との会合か何かの折に、座興のつもりで、^スラー・アクバル（アッラーは偉大なり）^スラー・イラーハー・イラッラー（アッラーの他に神は無し）^スとアラビア語で言ったところ、相手は真顔になって、「ミスター・ワタナベそんなことを冗談に言つてはいけません。それは信仰の告白なのだよ」と叱られました。私はイスラムで仕事をする者としての知識として口にしたのですが、彼等イスラム教徒にとってみれば、それは絶対的な戒律の根本に関わることなのでしょうね。こと宗教になると彼等の心の内まで理解することはできません。理解できないまま仕事で彼の地に出かけて

行くのですから難しいことです。

濫澤 でも出て行かないことには日本の経済は成り立ちませんね。

渡辺 そうです。外に出て行かないことには、成り立ちません。難しいですよ。

濫澤 渡辺さんの今日までの来し方から、様々な興味深いご体験をお聞きしてきました。この対談「博聞意伝」の締めとして、出席者から次代への提言をいただいております。すでにお話してくださったことの重複でもかまいません。お願いします。

渡辺 日揮が三期続けて赤字決算となり、私がその後を受けて、社長になった際に言った言葉があります。それを締め言葉とさせていただきます。「今日を昨日の単なる延長と考えてはいけません。そして明日を今日の単なる延長にしてしまつてはいけません」。

濫澤 有難うございました。

（わたなべ えいじ／しぶさわけん）

〔二〇一六年七月四日収録〕